

UDLM

2

vol.302

February 28th
2021

足跡を辿り、
残して

- p.2-6 指導教員と振り返る今年度の研究
p.7-9 2020 年度修士研究：
都市への想いを磨き、熟成する
p.10-11 2020 年度卒業研究：
都市への想いを描く
p.12 制作の現場から

雪原の足跡（北海道ニセコ町付近・2019 年 2 月撮影）

指導教員と振り返る今年度の研究

2020 年度はコロナ禍という危機に晒される中、卒業生 5 人・修了生 9 人が都市デザイン研究室にて研究を見事に成し遂げた。コロナ禍において集まって振り返る機会が得にくいことを受け、zoom 上で座談会を開催し宮城先生・

中島先生・永野先生から今年度の卒業設計・修士論文について講評をいただいた。
(聞き手：M1 河崎・藤本・鈴木・松坂)



一はじめに、卒業設計全体について講評をお願いします。

宮城 コロナ禍はわれわれも予想しなかった事態であった。結果として良かったケースもそうでなかったケースも見られただろう。苦労したところとしては、1 人で作業を進めざるをえず、**自分の考えを相対化するチャンスがなかった点**ではないかと思う。デジタル技術を含め、可能性は十二分に発揮してくれた。ただ、講評会はまだデジタルでは難しいことが明らかだった。より多くの人が発表を見られるという点では望ましいのだが、空間のスケール感の表現を含め、デジタルでのコミュニケーションは限界がある。

中島 例年とは違い、ヘルパーがいなかったのも、**各個人の等身大の作品になった**のではと思う。5 人の設計は、2 パターンに分かれていた。1 つは畑岡さん・合田くん・宮園くんのような、大規模敷地を対象としたデザインで、都市的なインパクトをもたらすような類型。もうひとつは、磯貝さん・鎌田さんのように、既存市街地の中で部分をデザインして街を変えるような類型。近年は後者の方が多かったように思うが、今年は 3-2 で分かれた。その点でテーマのバランスが図れていたと思う。狙っていることがうまく表現できており、一緒に進めていて面白かった。

永野 最終作品の密度は高かった。広域的な分析から建築の断面図に至るまで落とし込めていて素晴らしかった。一方で来年のことを考えると、後輩が手伝えなかったことは心配。今の B4 は昨年先輩の制作を手伝っていたので要領はわかっていたと思う。

作品の傾向としては、**みな自分とゆかりのある場所を選んで**いた。磯貝さん・鎌田さん・合田くんのプレゼンはどこか独白的、自己内省的であり、独特な説得力を持っていた。一方で出口研の卒制は「**今まで都市デザインが施されてきた場所にどんな次の操作を加えるか**」という視点があり、そこは我々も考え直すべきポイントだと思った。



一続いて、それぞれの作品について伺いたいと思います。まず畑岡さんはいかがでしょう

中島 起点は原風景という詩的なところからだった。しかし実際は水環境について元々問題意識を持っていて、とくに水質や循環などといったところに関心があり、テーマをうまく展開して最後まで持っていけていた。ただ、発表で指摘されていたが、建物の形が有機的でなく、なぜこの形なのかというところに関しては、詰めきれなかったように思う。

宮城 ランドスケープと建築に携わっている立場から言及すると、**両者のデザインのプロセスでは、それぞれプラグインする感性が異なるので、その抜き差しを短時間の間に繰り返すことは難しい**。言い換えれば、一人で建築とランドスケープをやりきるのはかなり困難。今回は、建築に関して経験値の厚さがより必要であるという事を実感したのではないか。その意味では、建築とランドスケープが対峙しちゃっているのが気になった。ただ、断面を見るとよく考えているので、これを進化させていくことで本人の求めていたものに近づくのでは。このスケールで設計するのはとてもたいへんなことなので、よく頑張ったと思う。

河崎 スケールの行き来というのは都市デザイン研究室では従来から言われていることだと思うが、宮城先生がいらっしゃって、**ランドスケープと建物の関係を往復していくという視点も得られてきているのはかなり大きい**ですね。

永野 水という大枠自体は早く決まっていた。それだけに、コンセプトの「**ひたる**」のパターンがもう少し明快に出ていればよかった。

最初の段階で建築スタディのバリエーションがあまり展開できず、小粒なパターンとやや大胆すぎるパターンの 2 択になってしまった。最初のバリエーションがもう少しあって、



水との関係のメリットとデメリットを整理できればよかったのかも。

でもいずれにせよ、建築の直線とランドスケープの曲線を生かすというデザインの芯を持ったなかで、**最終案はかなり細かなスタディの経験を蓄積してくれた**のではと思う。

一次に磯貝さんについてはいかがですか。

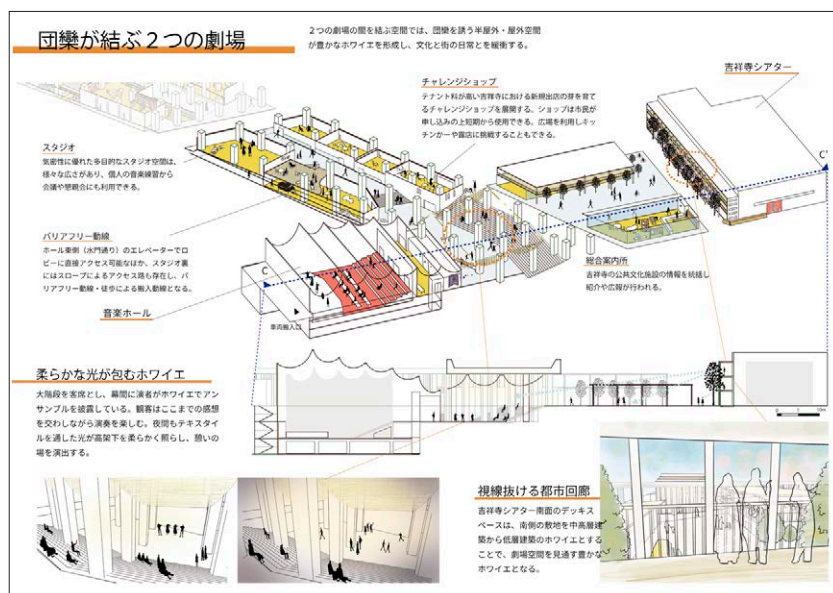
中島 当初から一貫してこどもへの愛情に溢れていて、**優しい提案になったと思う**。磯貝さんらしくこどもの話から始まっていた。場所を選んだ理由は整理されていたし、一つ一つの場所は魅力的だったが、地区の構造の変化や全体の流れが見えにくかった。具体的に提示した空間は 4 つかもしれないが、人の流れや、こどもがどう行き来するかに関して、個から地区に戻って検討してほしい。

宮城 一つ一つの場所に関して丁寧に提案していて、プレゼンも明快だった。アーケードと全体との関係に関してはもう一歩か。公園への提案が弱かったような印象がある。

中島 途中で大きい通りとの関係性の提案をやめ、それによってまとまりは出た。小学校や通学などこどもの動きとの関連もあるだろう。しかし 4 つの対象場所を見つけたことはすごい。アーケードからずらしたり、短絡させたり。

永野 相当スケールアップして、早い段階から作ってくれた。作り込みが得意な磯貝さんの良さが出た、非常に味わい深い提案。木材を懇切丁寧に使っていたりして、実際に試してみたいくなる。最後はコンセプトである図書館の機能だけ抜き出した全体図があっても良かったかも。

中島 地元を対象地としていて、各ステークホルダーにも話を聞けていたことと四日市市の動向とも相まって、実現可能性が高そうな印象を受けた。



▲「マチナカホワイエ 文化団樂の街・吉祥寺」アイソメ図（B4 鎌田作成）

一次に、鎌田さんはいかがでしょうか。

宮城 最後の頑張りとは相当なものだった。提案にまちへの愛が感じられて、とても気持ちが入っていたように思う。妙に突っ走ることもなく、かといってリアリティに寄りすぎず、その中間をついていた。住んでいないとわからない実感を落としこめていた。ただ、発表の前半部分が重かったかも。

中島 制作の過程が印象的で、吸収力が高く、本人の成長を実感した。完全非デジタルからあのパスまでの成長は見事だ。

最終的なアウトプットに関しては、特にコロナの状況下で渴望していて味わえていない「団樂」を提示していたのが、今年ならではのよいテーマだった。一つ一つの「団樂」のかたちが果たしてうまく回るかな？という不安はあるが、「ホワイエ」という空間言語でまとめあげたストーリーは説得力があった。いずれにせよ、「団樂」というと人の姿が見えてくるようで、ちょうどよいスケール感だった。

また、高架下や文化施設単体のリノベ案はよく見られるが、都市構造の中でそれらをまとめる提案はありそうでなかった。吉祥寺を対象敷地にした設計はある意味どこかで見たようなものも多いが、鎌田さんの案は吉祥寺への訴えかけたものとして新鮮だった。

永野 ハコモノに対する反発が戦略部分に込められており、屋外空間を生かしたポスト・ハコモノなるものを提示したという意味で可能性を感じた。舞台として吉祥寺が選ばれていた点もマッチしていた。パスは少しふわっとしていたけど、アイソメに迫力があって、強いメッセージを受け取れた。ここまでのアイソメを描いた人はいなかったのではないかな。

一次に、合田くんについて。

宮城 少し最終形を考えるまでに時間をかけてしまった。スタートは良かったけど、10月で方向を決めきって突っ走ればと思う。結果的に、最初考えていた内容に回帰していた気がして、そのこと自体はよかった。スケッチやパースからイメージが湧くものの、合田くんは場所のにめりこめないタイプなのかなという印象。最後の1ヶ月で本人のポテンシャルを感じたので、これから先それが進化していくことを期待している。

中島 倉賀野という敷地に戻るまで時間がかった。皆で古墳に興奮しすぎていたのかも。コンセプトで迷ってしまったことで、手を動かすのが遅れたのかな。内容としてはとても良いものだが、リハーサルや窪田先生の質疑応答で問われていたように公園施設の設計に留まっていた、建物や周辺への波及に関する意識があまり見えてこなかった。投げかけられた質問に対してうまく応えられていたなかったけれど、合田君のことだからきっと大丈夫。今回提案を詰めてやり遂げたので、今後いったん自分の作品を俯瞰で見られるといいと思う。

また、具体的には、「時間軸のデザイン」の部分は惜しい。周辺との関係もどこか空間的ではないというか、どういう風に周辺が良くなるのか考えられられるともっと良かったかな。

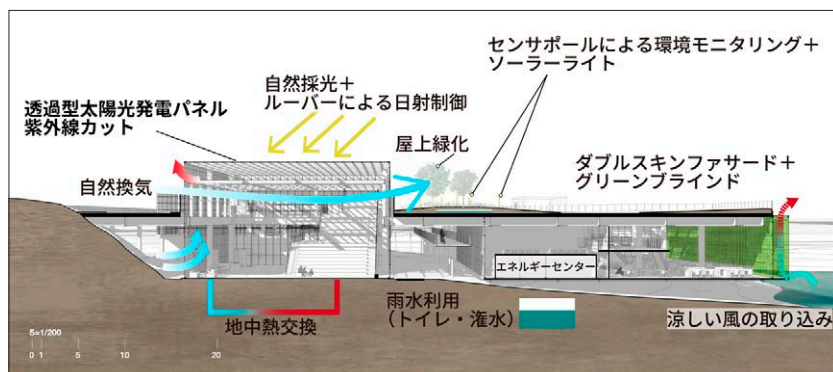
永野 彼は本当に勉強家。卒論会議の発表内容が毎度印象的だった。そのときのマイブームに振り回される傾向もあったが（笑）、関東平野全体の巨大なスケールの図や、心電図みたいな植生ダイアグラムとか、毎回新鮮なダイアグラムを提示してくれていて、とにかく卒論会議が刺激的だった。

最後に、宮園くんについてお願いします。

宮城 卒制でこれ以上のものを求めるのは酷だが、ここまでやり遂げたのであれば建築計画を詰めてほしい。プログラムを配置して外形とスケルトンのボリュームを挿入するだけでは、ランドスケープとのつながりが弱いように見えてしまうのでそこが惜しい。

中島 よくできていた。都市工では珍しく自分のデザインに集中し、インポーズしていた。あえていうとノイズが存在せず、自分はあそこでは働けないかも。周囲から「浮いている」のめずっと気になっていた。ゲートとなる駐車場についてももう少し練る余地はあったのかな。ただ、そういった点がこの案の評価を低くすることは決してなく、最初から構想してかたに落とし込む能力が凄い。

永野 完成度はとにかく高い。環境断面図も良かったが、どの点に新しさがあったか。建築やエコシステムとしての新規性は見えなかった。発表リハーサルの時点で環境断面図を見て「天窓が暑そうだ」と（笑）。環境断面図を起点に考えることで建築そのものが変わる、といったことがあるとより良いのでは。そのあたりをもっと一緒にスタディできると良かったが、そこは私も反省です。小泉先生から近代建築のありかたや材料について問われていたが、既存の建築が持つ本質的な価値・魅力をどう活かしたのか、ということらどと思う。



▲「National Ecosystem Service Center - Landscape for Ecosystem-based adaptation -」環境断面図（B4 宮園作成）

一続きで、修論についてお伺いしていきます。
まずは松本さんから。

永野 彼は建築4年の時から55HIROBAやソトノバなどずっと人に関心があって、それを修論で回収してくれた。単純に保全するとか開発に反対するとかという時代は終わっている。二項対立をどう乗り越えていくかという課題に迫ってくれたということだと思う。手賀沼PJで書いてくれたこと、また入り込めていないところまで入っていたのでPJにもいい還元が生まれそうで、感謝している。

中島 「働きかけ」というのが魅力であり、新規性。一方で論文に関してはもっと「働きかけ」を強調したほうが主張が明快になったかも。また今後担い手不足が言われている中で、変貌していく郊外住宅地における「働きかけ」の可能性や課題について論じていけるとよかった。
論文は非常によくできていたのでぜひ学会で発表してください。

宮城 個人的に興味があるのはそうした「働きかけ」の蓄積があるところがそうでないところと比べて、例えば植生の様子など、環境の質がどう変わってくるのかということ。そういうところが将来的に見えてくるととても楽しい。

一次に、山口さんについて。

中島 論文はよくできていて、ケーススタディも丹念に資料に当たって、よく調べているのだけど、人に伝えるときの内容の整理がもう少し丁寧にできるとよかった。
コロナの影響で半年早くウィーンから帰らざるをえなかったことは大きくて、現場で感じることも現場でしか集められない現象のデータがなくてあっさりとした感じに見えてしまった。
またウィーンだけでなく、他の都市との比較の視点があるとよかった。

永野 山口さんは交通工学的な視点がずっと強かったが、最後に事業のひとつひとつまで見て都市空間まで落とし込んでくれて彼女なりによく頑張ったと思う。
ウィーンならではの独自性とか先進性は何かというところ。20分都市みたいな現代的な概念で検証するみたいな方法もあったのかも。

宮城 マクロな都市計画と地区レベルの空間ビジョン、街区のレベルの空間構成まで見ていたからまとめるときにその難しさはあったと思う。外からの視点で見ているので相対化する鏡のような対象があるとよかったかも

しれないね。将来交通コンサル系に行かれるとのことで、他の事例を見ながら相対化することはできるかもしれない。

一続きで、應武さんはいかがでしょう。

中島 卒業設計から続いているテーマで一貫している。彼女の持つ集中力を実感させられた。今まででないような形で鉄道と人との関係を提示できた。「親鉄性」という新しい概念はわくわくした。いろんな議論を呼んで、次の研究を生むような研究になったと思うので、その点高く評価できる。

宮城 親水性とのアナロジーで考えた時のように護岸の断面など、空間の物理的な属性が出てくると、また違った視点を提供できたのではないかと。川の水面は下がっているけど、鉄道敷の断面は多様。断面をもう少し丁寧に押さえてもらえると面白かった。

永野 これから20～30年経つと鉄道も静穏化しているんな人が「親鉄性」の研究をするようになるのかも。そのバイオニアになったと思う。基礎研究なので、基礎情報のようなところもしっかりまとめたい欲しい。
應武さんは、本人は苦しみながらもかもしれないけど、客観的には言語化・図化が非常に得意なのかな、研究者だな、と感じた。あとは調査した時期がよかった。コロナ禍におけるフィールドワーク研究のいい先例となったのでは。

一次に、佐鳥さんについて。

中島 集まってくる歴史の資料をどういう視点から解釈するかというところで「分節性」というテーマで何を明らかにしたいかが見えて一気に進めた。卒論の反省を踏まえて、図化にこだわっていてよくできていると思いま

す。ぜひこちらも学会で発表してほしい。

宮城 「分節性」という言葉が出てきた時に「空間的分節」とより抽象的な「概念的な分節」の折り合いが付いているときに明快だったし、初めて聞く人にもより伝わったかなと思う。しかし学術的価値が高く、精緻な分析を経た論文であることは間違いない。

永野 「分節性」の先に軍港都市固有の言葉が見出せるとよかったかもしれないが、変に背伸びしていない言葉としてはよかったし、そこも含めて信頼性が高い研究だと思う。呉市史の一部に入り込んで行ってもいいのではというくらい。

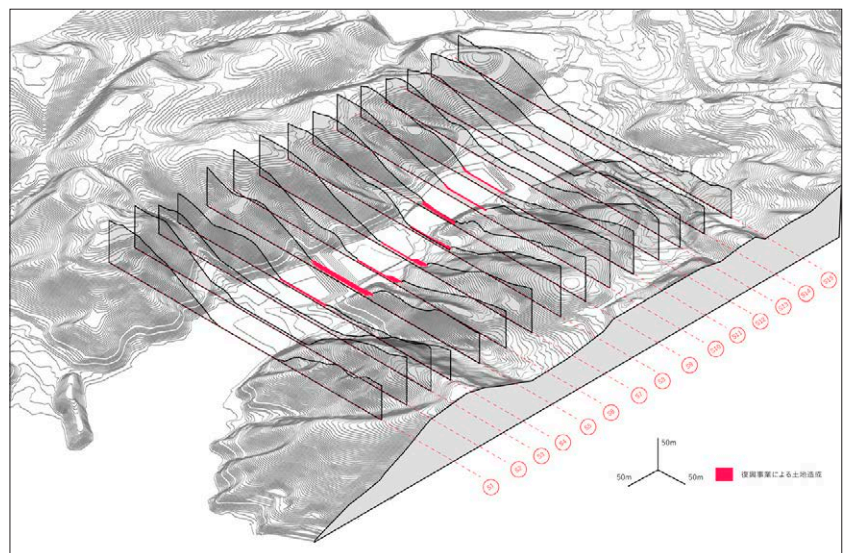
一方で、地図のスケールが一緒なので、もう少しズームアップした分析があると楽しく聞けたかなと思う。

一次に、砂川さんはいかがでしょう。

中島 フィールドワーク命のような研究なので、コロナ禍の中、大変だったと思う。「沢」という言葉の中に一本の筋ではなくいろいろな言葉が詰め込まれている印象で、何が新しくわかったことなのかということが少し伝わりにくかったかなと思う。

宮城 CTスキャンのような3D断面図は設計の実践的ツールとして使えるような手法で、この手法で分析がされているというのは重要なこと。ただ砂川くんの関心はこのスケールではないと思う。もっと寄ったスケールの方に関心があるのではないかと感じているのだが。

永野 窪田先生の質疑で「復興デザイナーとして今後どういう振る舞いをすべきか」という議論をしていて、かっこよかった。細かいところをつつき合うのではなく、建設的な議



▲「三陸リアス沿岸漁村の復興期を通じた集落空間構造の変化—気仙沼市唐桑地域の「沢」に着目して—」連続断面図（M2 砂川作成）

論をあつめられるのは素晴らしいこと。
論理構成は飛び飛びでちょっと時間不足の印象だが、重要なテーマに真摯なアプローチをしてくれた。

一続きで、西野さんはいかがでしょう。

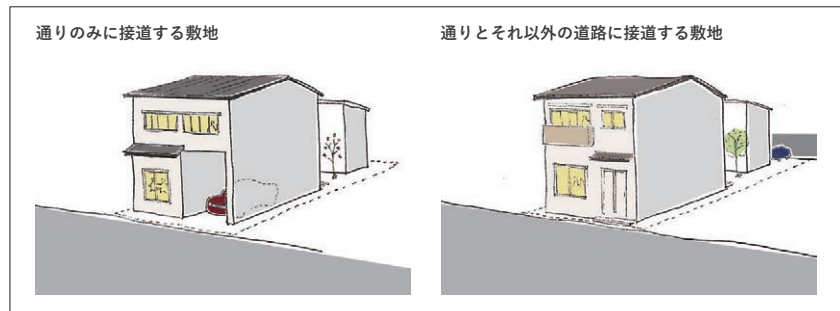
中島 焦点を絞っていて、このテーマでは1番になったのでは？非常に面白かった。「都市公園型地先利用」というのも新しい議論を呼ぶ概念を提示してくれているので、大阪の枠を外して今後考えていってもらいたい。

宮城 丁寧で本当によくやったと思う。欲を言えば材料と材料のぶつかり合いとか、にじみ出しを寸法で表すくらいまでしてもよかった。
私のデザイナーのキャリアの中で都市公園の設計はほとんどないが、この事例のように管理境界の線がルーズになっていく状態が生まれてくると、どんどんやってみたくなくなってしまふね。今後既存の公園のリノベーションが中心になっていくと思うが、この方法はPFI的な方法とはスキームが違うし、普遍性がより高いと思う。

永野 劇的にパワボがわかりやすい。彼とはPJで上野と手賀沼とも一緒だったが、上野は道路占用をやって、手賀沼は堤外地利用をやってと、彼の関心はそういうところだったんだと改めて思った。質疑応答も彼のやりたいことに対して多角的な質問が出てよかった。
将来性のある研究だと思うので、どういうところが今後の論点なのかを結論にしっかり書いておいてほしい。



▲「都市公園隣接店舗による地先利用に関する研究—大阪府西区・鞆公園を対象として—」都市公園型地先利用（M2 西野撮影）



▲「祭礼行事が町家型市街地の通り沿い住空間に与える影響—福井県坂井市三国湊地区を対象として—」ガイドライン（M2 宗野作成）

一次に、沼田さんはいかがでしょう。

中島 沼田くんの最後のまとめる力、発表としてよくできていた。ももとの機能分散型宿泊施設の一事例としてということだと思うが、本人がそれで納得できているかどうか。
研究よりも実践がどんどん進むようなものを対象とした時に何を研究していいのかというのは難しかったと思う。

若干分析手法が初歩的ではあるが、日本のコミュニティの象徴である銭湯に着目してゲストハウスと組み合わせるという新しい見方を提示してくれている点で価値がある。

宮城 アルベルゴディフューズだけど、京都のような近代以前から一種のコスモポリタンであった都市と、イタリアのような小規模な中世起源の都市ではだいぶ違うと思う。京都の特徴として宿泊する人間に相当選択性が認められる点があって、今回は銭湯に限定しているけど、食事など含めて京都には京都のやり方があるのではないかと思うのでそこを深められると面白いと思う。

永野 12月くらいに迷ってしまったのがもったいなかった。最後突っ走るところで調査量は足りなかったかもしれないが、沼田くんのセンスでうまくまとめたと思う。

学部2年生のときから「暮らすように泊まる」のテーマがぶれていない。すごいことだし、その視点があれば銭湯のような厳しい状況の都市施設に対してだって何か助言ができるということ。しかし、2年間でどれくらい彼が他の人とゲストハウス論について議論できたのかというのは気になるところ。

一次に、宗野さんはいかがでしょう。

中島 かなり先行して研究を進めてくれて他の人にもいい影響があったと思う。コロナの影響で途中現地に行けなかったのは残念だったが、三国PJをやりながら、現地で本当に必要とされている町並みガイドラインに関心や使命感を持って研究に取り組んでくれたので、迷いもなく進んだと思う。
内容としては思いやこうあるべきというようなイメージが先行していたので、はじめにその思いを共有できないと恣意的な分析に見られてしまうかもしれないが、デザイン研究としてはあるべき姿だと思う。多くの既往研究があるなかでどういう新しさがあるのかというのをはっきりと打ち出してもらえるとよかった。

宮城 住んでいる人目線で、祭りに対する意識の表出として、建物と祭りがどう折り合いをつけながら変化してきたかということが見えてきたと思う。だとするとガイドラインのようなものは必要なのだろうか。むしろしつらえを変化させてきた人々の定型化されない規範(=norm)がどう変化してきたのか、またどこが変化しないのか炙り出せると面白い。

永野 1年目から作業していて堅実な蓄積があった。西村先生門下生中心にこれまでたくさんの方の既往研究をやってきた人たちが三国で実際に住んでいる現地の方々とバチバチに議論してほしい。そのためにこの研究を使ってほしい。

宮城 いい意味で研究者と地元の方々の「触媒」になると思う。

—最後に、繆さんについてお願いします。

中島 日本の都市を扱っていて、でもチャイナタウンという自分のバックグラウンドを掛け合わせたという点で彼にしかできない研究は刺激的で面白かった。

出店者やオーナーの話はわかったが、そこを使う人まで突っ込めるとニューチャイナタウンの社会像が見えてくるのではと思う。

日本でも他の国でもニューチャイナタウンはあると思うので、このテーマは発展性があると思うので、彼のライフワークになるようなテーマだと思う。

宮城 これからの社会のキーワードとして最近よく出てきている「多様性」の一つの発露としての価値が非常に高い。従来の「〇〇タウン」といったコロニー的なハビタットとは違って、いろんなものが混じり合ってグラデーションになっている可能性がある。そうすると目指すものはタイトルにあるような「エキゾチック」というようなものとは違うものなのかもしれないし、同化の方向に向かってっちゃうと面白くないので、そここのところのダイナミズムに期待している。

永野 中国人オーナーに土地の権利関係までヒアリングしてくれたのが貴重。チャイナタウンはこれまで我々の外側にあるような印象だったが、これからは内側にあるということなんだと思うし、相互理解を進めるべき間柄だということを再認識させてくれる研究だった。本郷などいろいろなところで適応可能なテーマだと思うので、比較研究してもらえるといい。

—ここからは学生からの質問になります。発表のテクニックの身につけ方について教えてください。

宮城 誰に向けて発表しているのか、相手は何を欲しているのかというのを意識する必要がある。相手によってコンテンツのウエイトの置き方を変えていいと思う。

中島 研究のタイプによっても違う。記述的なものは事実の羅列みたいになってしまう。発表だと分析のフレームをはっきりと強調して発表しないと難しい。

永野 スライドが多すぎるとか、言いたいこと全部言ってやったぜ！みたいな精神が都市デザイン研究室の悪い伝統みたいところはある（笑）。でも今年度はそういうのがなくて、それはパワーポイントを使ってシンプルな研究室会議発表している人が多かったことと深く関係していると思う。

—最後に、総括とこれからの研究についてアドバイスをお願いします。

永野 今年度はコロナ禍におけるはじめての修論だった。うまくいった点や失敗、ノウハウなどは後輩と共有して伝承してほしい。今年度は提案指向型の研究が多くて、都市デザイン研究室として誇らしく、聞いていてエキサイティングだった。



中島 研究室として気になっていることとして、PJはみんなでやって、研究は個人でということ、その中間がない。個人でやると限界があるので、関心テーマの近い人同士で議論する場や勉強会などやってほしい。これはコロナでやりにくくなってることもあるが、オンラインだからこそやりやすいという面もあると思う。

また研究を誰のためにやるかと言った時に、まずは自分の役に立ててほしい。そういう研究は切実で個性が出ていい研究になる。次に進むキャリアでここで行った研究をまずは自分自身で活かして、それを通じて世の中の役に立つ人間になってほしい。今年度はそういう論文が多かったと思うので期待している。最後に、「1つの事例だけでいいのか」という質問は質疑応答でも多く見られたが、複数事例見ることで見えてくるものもたくさんある。1つの事例だけを見ることの美学と同時にその限界も意識しながら、研究の組み立てを考えてほしい。



宮城 修論については自分のキャリアや職能観とどのレベルでつながっているかというのを意識することが大事だと思う。都市デザイン・都市計画の専門性と社会とのつながりの中でこうありたいということや、そこにいかに関わる価値観を反映させようとしたか、ということやをさまざまなスケールやソフト／ハードの要素において意識をしておいたほうがいい。今は社会に出るといきなりいろいろなことをやらなくてはいけなくて、そのときにその意識が大事になってくる。

また、従来の都市デザイン研究室の伝統的な手法は踏襲すればいいと思うが、ハードな技術に対する意識が若干足りないようにも感じるので、ぜひそこにも挑戦していったほしい。



—貴重なお話ありがとうございました。来年度も引き続きご指導のほどよろしく申し上げます。

2020 年度修士研究：都市への想いを磨き、熟成する

斜面林保全条例の評価及び人々の「働きかけ」を踏まえた包括的な崖線空間マネジメント
千葉県我孫子市・手賀沼北岸を対象として



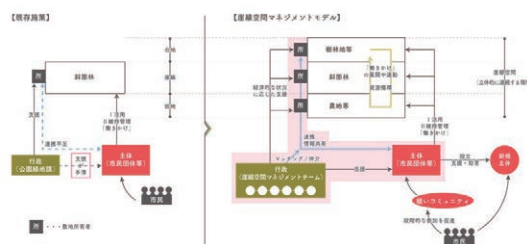
松本 大知
MATSUMOTO Daichi

対象地

千葉県我孫子市

キーワード

斜面林、条例評価、市民活動、空間マネジメント



研究の概要

我孫子市の手賀沼沿い斜面林を中心とした「崖線空間」の保全に関する条例の実効性評価と市民や企業による空間の維持管理や活用の「働きかけ」の実態を明らかにした。

研究の目的

斜面林保全条例と「崖線空間」への「働きかけ」実態の関係性を把握し、成熟期を迎える郊外市街地の崖線空間マネジメントに向けた示唆を得て、モデルを提示する。

修士研究を終えて

ご協力、ご指導頂いた方々に感謝です。「崖線空間」への「働きかけ」を行う皆さんは、実態のヒアリングや活動に参加させて頂くなど、大変お世話になりました。手賀沼プロジェクトの取組みで、ヌマベに着目し、周辺の農地や崖線、台地上の市街地まで連続した環境が手賀沼という1つの魅力的なパブリックスペースを形成していることに気づき、その中で「崖線空間」への市民の「働きかけ」に焦点を当てました。結論で提示した市民と行政との連携を見据えたマネジメント手法を地域に反映できるように考え続け、関わりながらフィードバックしたい。

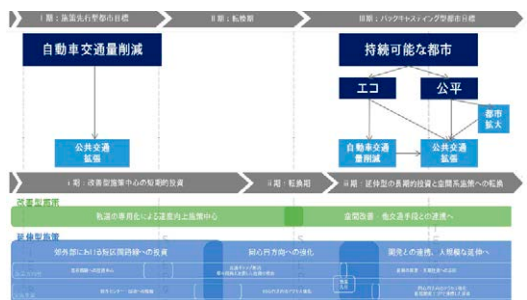
同期から—Miao より

Combined with the project of our laboratory, Daichi's research focuses on the comprehensive management of the green space along the shoreline, which has a significant practical value. With his love and enthusiasm for Teganuma, he has conducted in-depth work. And all his fieldwork and analysis are detailed and methodical. The management model of the waterside green space proposed in his conclusion is also worth learning for Chinese cities. Although the land system is different, the process with multi-participation is necessary.

ウィーン市における都市目標と連動した路面電車への公共再投資施策の展開
—マスタープランおよび改善型・延伸型事業に着目して—



山口 智佳
YAMAGUCHI Chika



研究の概要

路面電車を維持する都市において、都市目標や都市・交通政策の展開を概観し、その中で路面電車の公共投資への接続や活性化の要素を明らかにした。

研究の目的

世界でも最大級の路面電車網を維持してきたオーストリア・ウィーン市をケースとして、路面電車公共再投資の活性化に必要と指摘される都市目標との接続を確認する。

修士研究を終えて

研究室の先生方と、研究をサポートして下さったウィーンの関係者の方に感謝申し上げます。パンデミックの関係で、途中からいきなりオンライン調査・行政文書がメインリソースとなり、政策的な動きに注力することになったのは想定外であった。その一方で政策の中での位置付けや施策展開についてじっくり腰を据えて調査する覚悟が出来た。市が多くの課題を抱えつつも未来志向の目標を提示して、それを40年かけて力強く推進していく様子を構造化できたことは重要だったのではないかと考えている。

同期から—松本より

富山PJ、ウィーン留学という山口ならではの背景で語られた路面電車への公共再投資施策に関する興味深い研究でした。上位枠組みと事業実施の関係性が焦点でしたが、身体スケールの空間性への興味もそそる研究でした。今後もスケールを横断し、ウィーン特有の路面電車のある都市デザインから得た知見を日本の都市にアブライする手法について考えて頂きたい。

線路脇空間における「親鉄行動」
—江ノ島電鉄沿線地域を対象として



應武 遥香
OTAKE Haruka



研究の概要

人間の心理への寄与、通行・日当たりなどの線路敷の空間的利用など、鉄道の輸送以外の機能に着目。これを成立させる営みを「親鉄行動」として見出した。

研究の目的

線路脇空間利用の実態やその経緯を「使いこなし」や「安全性」の観点から評価し、安全性を含む使いこなしである“親鉄行動”を見出すこと。

修士研究を終えて

「鉄道が地域にとって好ましいものであってほしい」—このためのアプローチに都市を選び都市工学科に来て、卒業制作でも演習でも鉄道をテーマにしてきた自分にとって、修士研究は大学での最後のチャンスだった。そこで、地域にとって鉄道はどのような存在か、線路脇での生活はどのようなものかを調べることにした。振り返ってみれば、理念先行だった自分が初めて地に足を付けようとしたとも言える。地域の方々には本当に良くしていただき、鉄道と共にある生活を垣間見ることができた。この経験を糧として、今後も鉄道に向き合っていきたい。

同期から—山口より

たまたま同じ交通系・鉄道系を主要な研究対象としていますが、電車への視点やアプローチが全く異なっている点が面白く、デザ研の多様性を改めて感じています。親水性を参考としたフレームワークは、その視点があったかと常に驚きがあり、ゼミ等で聞いていて勉強になりました。

対象地

江ノ島電鉄沿線地域

キーワード

鉄道、親鉄、線路脇空間、生活景

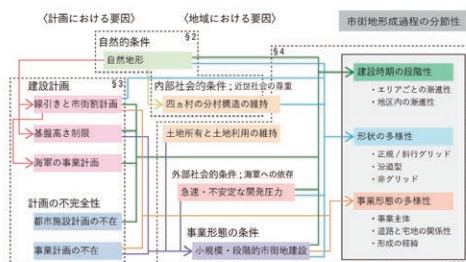
軍港都市呉の市街地形成過程における分節性の発現 —都市建設期（1886-1921）に着目して—



佐鳥 蒼太郎
SATORI Sotaro

対象地
広島県呉市中心市街地

キーワード
軍港都市、グリッド市街地、
都市形成史、都市建設



研究の概要

海軍によりトップダウンというイメージの存在する軍港都市も実際には当初計画を尊重しつつも地域による主体性が発揮されながら建設されたことを示した。

研究の目的

軍港都市呉の都市建設期における都市建設計画と都市形成の地理的・空間的な展開から市街地形成過程における分節性とその分節性の発現メカニズムを明らかにすること。

修士研究を終えて

卒業研究から引続いて軍港都市について研究することができました。むしろ、卒業研究があったからこそ、このような修士研究が可能になったのだと思います。両者で一貫していたのは、海軍依存からの脱却という問題意識で、今後も何らかの形で引き継いでいきたいです。本当に自分の好きなこと、やりたいことをできて幸せな修士研究だったと思います。自分ができるベストな研究かどうかはよくわかりませんが、自分にとってはベストな研究、佐鳥だからできる研究ということは胸を張って言えます。先生方、同期のみんな、ありがとうございました。

同期から一應武より

彼も自身の趣味である海軍から出発し、都市計画史的観点から論文という一つの形に仕上げています。趣味から出発すると研究の社会的意義を見出すことに苦労するが（これについては彼が書いた先月のweb magazineをご覧ください）、彼ならではの面白い論文になっている。ところで、彼の作業環境の充実ぶりはすごい。カッコイイ！！

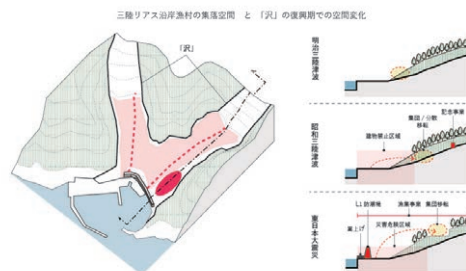
三陸リアス沿岸漁村の復興期を通じた集落空間構造の変化 —気仙沼市唐桑地域の「沢」に着目して—



砂川 良太
SUNAKAWA Ryota

対象地
宮城県気仙沼市唐桑地域

キーワード
三陸リアス沿岸漁村、復興期、
集落空間構造、沢



研究の概要

現地踏査および資料調査を通して、対象地における今次震災の復興計画の実態と復興事業の集落空間構造への影響を集落の骨格をなす「沢」に着目してレビューした。

研究の目的

対象地の 1) 過去と今次の震災における復興施策の沢への影響を整理すること、2) 復興期を通じた沢の空間変化の特徴を明らかにすること。

修士研究を終えて

自分が東日本大震災の漁村復興について論文を書き上げられるのかについては時折不安を感じておりました。大学院での2年間では復興の現場を知る先生方と議論する機会に恵まれ、少しずつ自分の経験の少なさを補うようにしていました。それでも、M2の夏の現地調査までは、自分が被災地、そして被災された方々とちゃんと向き合えるのか、自信をもてないままでした。デザ研で地域の空間や人の魅力を発見する力を培えたおかげで、現場で自分なりの切り口をなんとか見出すことができました。これからも現地とのつながりを大切にしていきたいです。

同期から一佐鳥より

規模は違えど「海辺のまち」の研究仲間です。対象地は変わりましたが、「漁村」「津波」というテーマはずっと一緒だったと思います。復興デザインとも並行して大変だったと思います。お疲れ様でした。東北に決めてからは精力的に調査を進めて、現地の方々と信頼関係を結べているのが伝わってきました。コロナが収まったらみんなで漁船に乗りに行きましょう。

都市公園隣接店舗による地先利用に関する研究 —大阪市西区・靉公園を対象として—



西野 一希
NISHINO Kazuki

対象地
大阪市西区・靉公園

キーワード
都市公園、地先利用、
逸脱行為



研究の概要

都市公園隣接店舗による地先利用に関してその展開過程を捉えとともに、店舗・公園管理者へのインタビュー調査を通じた考察から規制緩和のあり様を示した。

研究の目的

対象地における地先利用に関して「どのように展開してきたのか」「今後どの様にあるべきか」という視点から紐解き、可能性及び課題を明らかにする。

修士研究を終えて

都市公園内部の空間ばかりが「賑わい」と称した付加物に彩られていく姿に違和感を覚え、本質的に都市に価値を与える公園の姿というのはその境界部が欺瞞のデザインであってはならないのではないかと考えたことが研究の導入であった。現状、対象地における地先利用はインフォーマルな現象という他にはないが、少なくとも「都市公園型 地先利用」という新たな公園管理・都市デザインのあり様を提唱する上で不可欠な基礎的知見であるとする。また、生まれ育った大阪のまちを新たな目線で逍遥できたことは、自分自身にとって大きな財産となった。

同期から一砂川より

西野君とはプロジェクトが2つも同じであったこともあり、多くの時間を一緒に過ごした気です。そのため、提唱していた「都市公園型 地先利用」には西野君の個人的な関心、公共空間への思い、プロジェクトで培った経験、すべてが詰まっているなど思わずはいられません。その実態についてここまで入り込んで調べられたことは本当に尊敬します。

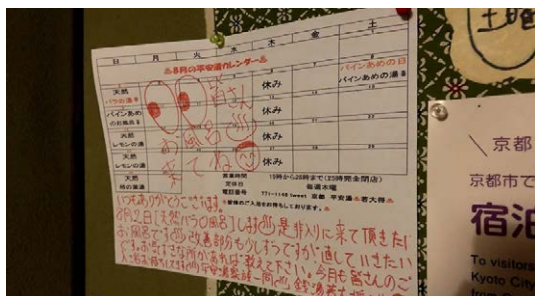
機能分散型宿泊施設としての「銭湯志向型ゲストハウス」に関する研究 —京都市におけるゲストハウスと銭湯の相互関係に着目して—



沼田 康佑
NUMATA Kosuke

対象地
京都府京都市中心部

キーワード
ゲストハウス、銭湯、協業



研究の概要

近隣銭湯の存在を意識しているゲストハウスを「銭湯志向型ゲストハウス」とし、立地条件等を分析した。また前提として銭湯・ゲストハウス両者の周辺空間を分析した。

研究の目的

地域に根差した観光形態の一つとして、日本の生活文化に即した、都市型の「機能分散型宿泊施設」のあり方についての示唆を得ること。

修士研究を終えて

まずは教員の皆様、研究室のメンバー、そしてヒアリングに応じてくださったゲストハウス・銭湯関係者の皆様に心から感謝申し上げます。本当に周りの人のおかげでなんとか完走できた研究だと思っており、自分の一個人としての無力さを再認識する機会になりました。一方で今回お世話になったゲストハウス・銭湯はどれもその運営者の強い思いが反映された素敵な施設で、一個人がなせる可能性の大きさをそこから学びました。こうした実感を忘れずに、強い思いを持って実行できる人を目指して邁進していきたいと思っています。

同期から一西野より

僕と同様と言っては失礼ですが、中々実地でのヒアリング調査に踏み切れず苦戦していたという印象です。研究としては背景に地域の社会的な問題を設定していますが、彼の卒制も踏まえると、彼自身が理想とするライフ/ワークスタイルのようなものが大きく根底にあるのではと感じています。京都に行く際は是非おすすめの銭湯とゲストハウスを紹介して欲しいです。

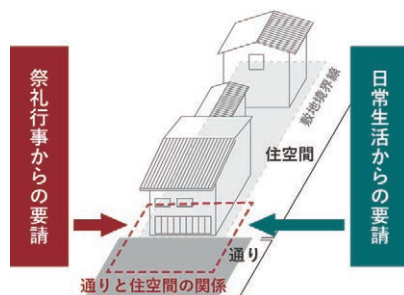
祭礼行事が町家型市街地の通り沿い住空間に与える影響 —福井県坂井市三国湊地区を対象として—



宗野 みなみ
MUNENO Minami

対象地
福井県坂井市三国湊地区（旧三国町）

キーワード
地域祭礼、歴史的町並み、観賞空間



研究の概要

曳山の見物空間の条件は通りと住空間の関係を密接にする条件と重なる。建物配置の工夫により生活様式の変化を受け止めその密接な関係を実現できることを明らかにした。

研究の目的

通りと住空間の密接な関係の継承を町家型市街地における町並み整備の方向性として見出すため、祭礼が住空間に与える影響とその関係決定の仕組みを明らかにすること。

修士研究を終えて

ファサード保全型町並み整備への疑問に向き合おうとテーマを設定しました。主張を一定程度研究成果として発信できた一方で、自分の脳みそで処理しきれないことを恐れるあまり、小ぎれいにまとめすぎたように思います。聞き取り調査でのそわそわと浮き足立つほどの興奮、ひしひしと感じる人口減少下の三国と三国祭の置かれた状況の深刻さ、そういったものをもっともっと研究に取り込めたのではないかと。提示した町並み整備の方向性と手法は、今のままでは机上の空論です。UDCSの方の協力を得て長い時間をかけて考え続けていきたいです。

同期から一沼田より

早い段階から分析の先の提案まで考えていたことが印象に残っています。実際に具体的なデザインについての示唆にまで言及できていて、一貫性と実行力に感服です。個人的に一番都市デザイン研究室の研究っぽいなと感じていて、後輩の皆さんには是非参考にしてほしいと思っています。（と、勝手にここで宣伝しておきます。）

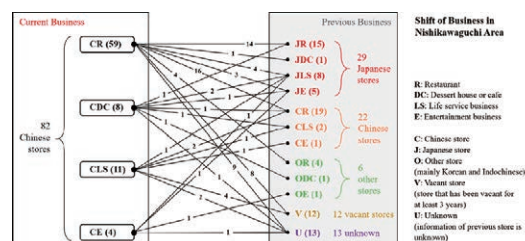
The Impact of the Exotic Culture Carried by the New Chinese Immigrants on the Urban Space of Host Society : A Case of “Nishikawaguchi New Chinatown” (中国ニューカマーに伴う異文化がホスト社会の都市空間に与える影響—西川口ニューチャイナタウンを事例に—)



繆 思然
MIAO Siran

対象地
Nishikawaguchi area in Saitama Prefecture

キーワード
New Chinatown, New Chinese immigrants, Ethnic network, Multi-cultural symbiosis



研究の概要

A comprehensive analysis of the formation process, current characteristics and future vision of Nishikawaguchi new Chinatown was carried out in this research, and its differences from the old Chinatown in Japan were pointed out through comparative study.

研究の目的

Through the analysis of Nishikawaguchi Area's transformation process, this research is aimed to understand the formation and development of this typical new Chinatown, then predict its possible version based on the local policies and the intentions of Chinese immigrants.

修士研究を終えて

“Along with the globalization, how did the new Chinatown come into being?”, “Is it the same as the old Chinatowns in Japan?”... With such doubts, I started my research. Interestingly, the new Chinatown is a product of bicultural blending at the social level, while it maintains its distinctions with the host society at the urban spatial level. As I went deeper into Nishikawaguchi area, I got to know the living conditions of the Chinese newcomers, then learned how individual behaviors eventually changed the urban space there. Finally, I'd like to express my gratitude to all the members of our laboratory and the people in Nishikawaguchi for their kind help.

同期から一宗野より

中国から戻って来られない状況が続いていたにも関わらず、あっという間に対象地に入り込んで（ピカピカチーム！）調査を進め、論文の構成を練り上げた、そのスピード感に度肝を抜かれました。富士吉田プロジェクトで、お酒片手に地元の方と肩を組んで打ち解けていたことを思い出し、この研究は Miao 君の人柄と行動力の賜物だなと思いました。

2020 年度卒業研究：都市への想いを描く

ひたる

一水にひたり、水の景や音にひたる公園＋集合住宅ー



畑岡 愛佳
HATAOKA Manaka

対象地

足立区と葛飾区の区境

キーワード

都市、ランドスケープ、
原風景、暗渠



研究の概要

敷地を超えて存在する水循環システムに着目し、大地や周辺との調和を図った公園＋集合住宅を設計する。同時に、水にひたる新たな都市居住を提案する。

研究の目的

成熟期を迎えた日本の都市、殊に近郊街住宅地において、豊かな日常風景の積極的再生のあり方について考える。

卒業研究を終えて

空間デザインにおける「かたち」の意義が少し分りかけてきた気がする。いや、「かたち」の意義を問い始めることができたという表現の方が正しいだろう。私が抱く「空間／場」には言説的なもの（歴史・記憶等）と「かたち」が一緒に漠然とあった。むしろ言説が多くをしめていた。しかし、空間デザインとは、最終的には三次元空間への解釈であり、「かたち」を生み出すことが主にある（当然の？）ことに気付いた（言説的空間の重要性を否定するものではない）。そして、それは思ったよりも遥かに魅力的で深遠な行為なのだったと思った。

同期から一宮園より

研究室に集うことも一回もなく、みんなと意見交換できなかったのは残念でした。制作では自分と同じように水と空間の関係についても提案していましたが、自分とは異なるアイデアに刺激を受けました。近い分野を志していると思うのでこれからも同志として切磋琢磨できたらいいと思います。

子供へのものがたり



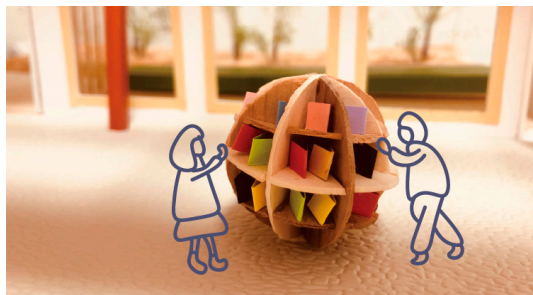
磯貝 桃子
ISOGAI Momoko

対象地

三重県四日市市諏訪栄町
（アーケード商店街）

キーワード

子ども、図書館、空間体験、
多様な選択肢



研究の概要

市立図書館の移転に合わせて、柔らかな図書空間を商店街に点在させ、大人が子どもに戻れるような場、また大人に子どものエネルギーを伝播させる場のデザイン。

研究の目的

今までの設計で全て子どもを対象にしてきて、その集大成として子ども（街）の周辺や将来へのストーリーを描きたいと思い、「ものがたり」というタイトルにしました。

卒業研究を終えて

今年は同期みんなで集まって作業ができず寂しかったですが、自分なりに最後までやり遂げられたかな、と感じているので嬉しいというのが率直な感想です。初めは地元はつまらないところだと思っていましたが、対象地にする中で魅力を感じられたのも良かったと思っています。メンターの齋藤さんをはじめたくさんの方、先生方に支えてもらって、多分それがなかったら卒業制作から逃げていたと思うので、本当に感謝しています。ありがとうございました。

同期から一畑岡より

子供への暖かい思いであふれたブレボやプレゼンが素晴らしいと思います。優しく親しみある語り口やかわいらしいスケッチはぐっと人の心をつかみますね。彼女の子供へのまなざしが今後、どう発展していくのか楽しみです。また、オンラインで、同期とのコミュニケーションが希薄になりがちなか中、定期的にメッセージをもらって、励みになりました。ありがとね。

マチナカホワイエ

文化団楽の街・吉祥寺



鎌田 南穂
KAMATA Minaho

対象地

東京都武蔵野市吉祥寺東

キーワード

文化、憩い、公共施設、
吉祥寺



研究の概要

公共文化施設のホワイエを街中に開放しそれらが繋がることで、人々が文化を発信・受容し、憩う「マチナカホワイエ」を形成し、街に文化を介した団楽と創造性を生む。

研究の目的

文化と深く関わり合い「生み出す」街として発展してきた吉祥寺において進む消費地化に向き合い、公共文化施設や街のウラに着目し街の創造性を担保する方法を模索する。

卒業研究を終えて

街と設計への興味で都市に進学したものの集住で躰き設計に苦手意識を持つようになった私でしたが、やりたかったことにもう一度向き合いたいと思い卒業制作を選択しました。この選択は大成功で、卒制期間だからこそ様々なことを学び吸収できたと感じますし、できてくる空間・そこで過ごす人々を想像しながら手を動かす時間は難しくもかけがえなく楽しいものでした。立ち止まりも多かった私の背中を押して下さった先生方や先輩には感謝してもきれません。社会に出てまちづくりの精神や手と頭を動かすことを大事に頑張りたいです。

同期から一磯貝より

2年生の頃から入隅や中間領域、そして文化を大切にしていたように思います。その一貫した感性が素敵だなと思うし、何よりみなちゃんの描く絵のセンスにはいつも嫉妬していました笑（絵以外も人間性も全部）今回のアイソメも素敵で、スクショしました！！実際に仕事で携わる建物の中でもみなちゃん mind が詰まった空間を作ってくれたら嬉しいです。

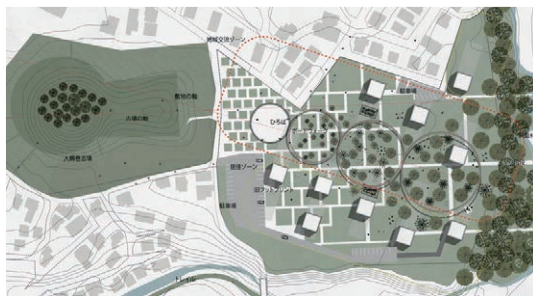
動く庭に暮らす



合田 智揮
GODA Tomoki

対象地
群馬県高崎市

キーワード
社宅、ランドスケープ、
ライフスタイル、郊外



研究の概要

利根川水系の河岸段丘の淵にたたずむ豊穡な大地の上に立つ社宅に、古墳という周辺環境を生かしつつ近隣住民に開かれていくランドスケープとプログラムの提案。

研究の目的

地元と東京で暮らして感じた違和感、市中心部の変容に抱いた違和感から、自然と同じ時間軸に沿いながらゆったりと暮らすライフスタイルのあり方を提案すること。

卒業研究を終えて

まずは無事に終わってほっとしています。自らのスケジュール管理の甘さ・生活体調管理不足や、コロナ禍での制作に対するストレスから、最後は息も絶え絶えで制作に取り組むことになってしまいましたが、先生方・先輩方に支えていただき、なんとか乗り切ることができました。そんなわけで、卒業制作では何より他人に頼ることの大切さを学べたことが自分としては大きかったです。とはいえ、個人としての諸々の知識・スキル不足も痛感したので、大学院では都市に対する視座・リサーチ手法やアウトプットなどを積極的に学んでいきたいです。

同期から一鎌田より

出身地である高崎を自然と人為の狭間にある場所として捉え、最近の駅周辺の開発に感じた違和感を卒論会議から合田くんらしく言葉にしていたことが印象的でした。植生についても色々勉強して提案に詳細に取り入れていたことや得意の円形が庭に走る様子がとても素敵でした。研究室では黙々と作業してはたまにお喋りして、存在に刺激をもらいました！ありがとうございます！

National Ecosystem Service Center -Landscape for Ecosystem-based adaptation-



宮園 侑門
MIYAZONO Yuto

対象地
奈良県大和郡山市
奈良県中央卸売市場

キーワード
気候変動、生態系サービス、
大和平野、EbA



研究の概要

全世界的な気候変動の影響を踏まえ、奈良県中央卸売市場を生態系に適応したアプローチに取り組む複合研究施設へとコンバートさせる提案。

研究の目的

地域生態系サービスを最大化させることで大和川流域圏の災害激甚化を緩和させ、国内の生態系サービスを再活性化させる象徴的場所を作る。

卒業研究を終えて

学部間の総決算が少しはできたかな 個人的には高校時代に模擬国連で気候変動を扱った経験がここで再びもどってくるのかと、少しエモくなりました。模型製作ができなかったのですが、その代わり動画でのプレゼンテーションを試みたのは良かったです。この状況を逆手に取って、関西で制作を行なったことも貴重な体験だったと思います。今後も新しい表現・プレゼン手法に取り組みたいと思っています。学部設計演習からずっとご指導いただいた都市デザイン研究室の先生方ありがとうございます。M2の先輩方は修了おめでとうございます。

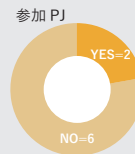
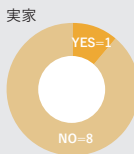
同期から一合田より

進捗の生み方が本当に秀逸。毎回の卒制会議ごとに最終成果物につながる提案・確定事項が必ずあって、加えて元々の表現力の高さから最後は動画まで作り込んできて、ものすごく完成度が高かったです。デザインに関しても、ハコ型の建物からどう展開していくんだらうと思ったら、有機的なランドスケープがめり込んできて最後の迫力は圧巻でした。お疲れさまでした！

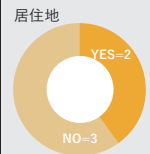
COLUMN 1 コロナ禍における研究の姿勢

Q. 対象地と〇〇は同市区？

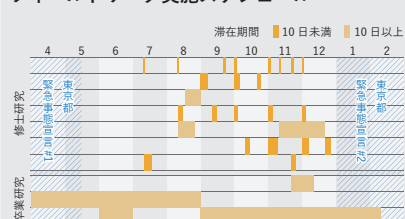
修士研究 (n=9)



卒業研究 (n=5)



フィールドワーク実施スケジュール



コロナ禍で始まった卒業研究は自分になんらかのゆかりのある土地を全員が選んでおり、これは調査の制約という点も大きいだろうが、自宅周辺環境への関心の高まりを示しているようで興味深い。また夏以前は現地へ行けない状況があったが、オンライン化が進み長期間現地に滞在したり、うまく感染状況の波に合わせてスケジュールを立てたり、新しい研究スタイルが生まれている。

COLUMN 2 修士1年の2月に思う

このコロナ禍において外出自粛が要請される中、フィールドワーク・聞き取り調査を思うようにできない。最後の追い込みの時期であってもお互いに顔を合わせて鼓舞しあうようなことはできず、1人で研究に向き合うしかない。そうした物理的・精神的な制約が突然課された中で、作品や論文というひとつの形としてまとめた今年度の先輩たち、後輩たちには畏敬の念しかない。この状況は確かに苦難であるが、今年度の研究を見てみると、この状況下で研究するという経験は確実に自分の都市観やキャリアに現在進行形で大きな影響を与えていると感じている。まだまだ先は不明瞭ではあるが、学生生活残り1年というのは変わらない。この状況をポジティブに捉えながら先輩・後輩たちの経験を活かし、またより状況に順応しながら、そろそろ研究のエンジンをかけていかなければ。のんびりはしてられない。(M1 河崎)

制作の現場から

未曾有のコロナ禍において、卒制生・修論生はその進捗にハンディを負ったと言っても過言ではない。それでも各人は十人十色の調査手法・制作環境を

取り入れることで、それぞれの観察や分析、思いを制作や論文として結実させた。写真とメッセージを通じ、デザ研メンバーの制作の現場を垣間見る。

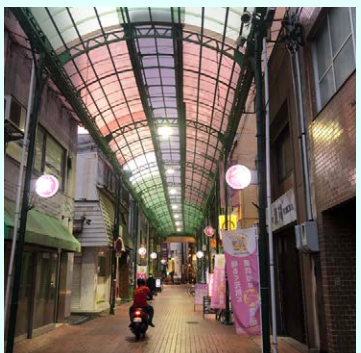
「調査のたびに泊まる唐桑御殿から見る海。少しずつできていく防波堤。」(M2 砂川)



調査中の一コマ (M2 沼田)



調査中の一コマ (B4 磯貝)



「実際に『働きかけ』主体の活動に参加した時の様子。」(M2 松本)



「模型作業の跡が欲しかったのですがオンライン制作のため写真がなく、敷地見学の際の1枚。」(B4 合田)



作業中の一コマ (B4 鎌田)



「現地調査の際は民泊を利用し、線路脇の建物に滞在させていただきました。『音はそんなに気にならないよ』というヒアリング結果を身をもって確認。」(M2 應武)



「ほっこりする一風景」(M2 西野)



「作業部屋が寒すぎて一時間に一回お茶を飲んでいました。PJでお世話になっている山本甚次郎さんのほうじ茶、台湾茶、各種紅茶、ルイボス茶、しそ茶、白湯」(B4 宮園)



COLUMN

BOOK OF THE MONTH



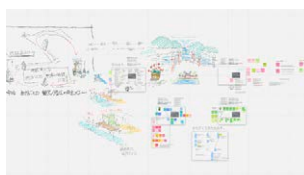
「農」はいつでもワンダーランド
編：ユギ・ファーマーズ・クラブ
著：海井清ほか
学陽書房
1994年

推薦者
M1 齊藤

約30年前、多摩NT開発区域に組み込まれた或る農村集落で、都市住民と集落のあいだに生まれた共存と連鎖の記録。彼らの思い描いた「アグリ・ニュータウン」は実現に至らなかったが、縮退時代のいま改めて見直されるべき価値観であるように思う。

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/a/blog/>



宇治PJワークショップ

宇治PJではフューチャーデザイン宇治の方々をお招きしたオンラインワークショップを開催しました。外からの視線で作成した提案に対して内からの視線でご意見頂き大変充実した会となりました。(M1 谷本)



PLUS KAGA チャンネル配信

2/28にオンラインで、PLUS KAGA 5期生がまちづくりプロジェクトを発表しました。1~4期生による特番もあり、空間マネジメントに関するトークセッションを行いました。(M1 鈴木)

LOOKING BACK AT FEBRUARY

1st-2nd M1 修論ジュリー
8-9th 卒論・卒制講評会
13th 宇治 PJ WS

POSTSCRIPT

研究室生活が思うようにいかない1年でしたが、そんな中苦楽をともにしお世話になった先輩後輩たちが旅立ってしまうなんて突然ぽっかりと穴が空いたような気分です。まだまだ話足りないのでもオンラインをフル活用して今後も関わりを持ちたいですね！修了・卒業される方おめでとうございます。そして今春院生になる方、これからもよろしくお願いします！(M1 河崎)